

“アシと蹄を考える会”がスタート！ —平成22年度第1回リム&フットケア・ワークショップ—

日本軽種馬協会では、平成22年度軽種馬経営高度化指導研修(軽種馬経営技術指導者養成・技術普及)事業・生産育成技術研修の一環として、新たな視点からの肢蹄管理について、装蹄師、獣医師の立場から意見を交換し、共通理念を養い、相互連携を強化するとともに、さらに高度な護蹄技術や予防・矯正技術を探ることを目的とした第1回目の研修会(ワークショップ)を平成23年1月27日に開催したので、その内容を簡単に紹介します。

研修内容

(1) 凹湾蹄に対するギブス包帯の応用(JRA日高育成牧場 大塚尚人：装蹄師)

繁殖牝馬の凹湾蹄(しゃくれた蹄)に対し、蹄に医療用ギブス包帯を巻き付けて固定することで、蹄の凹湾を予防するという新たな試みの結果として、装着後6週間経過した今も凹湾の防止が可能であり、経過良好と報告。

(2) 競走馬の蟻洞(北海道日高装蹄師会 設楽巧喜：装蹄師)

蹄冠部直下にまで至る重度の蟻洞により、蹄骨のローテーション(回転)を起こした症例に対し、深屈腱へのストレスを軽減し、ローテーションを防止することを目的に、蟻洞部を刮削した後、ルール厚尾蹄鉄(蹄の反回や旋回を容易にする蹄鉄)の装着と蹄下面へのエクイパックCS(蹄底充填剤)を充填する処置を解説。蟻洞部への治療として、牛の趾間腐爛用FRパスタ(馬では蹄又腐爛治療に使用)を5日毎に塗布していることも説明。

(3) 育成期における前肢側望X-ray画像による調査(JRA日高育成牧場 山口智史：装蹄師)

2006~2008年入厩のJRA育成馬に対し、入厩時・11月・翌3月に前肢側望(横)のX線写真を撮影し、伸筋突起(蹄骨の頂点部)を境界点として、その前方と後方の負面長を調査したところ、前方長は後方長の1.2倍であり、現役競走馬のバランスと同様の結果であったこと。削蹄時期になると総体的にその倍率が大きくなる傾向があったことを報告。

(4) 外向肢勢による蹄骨の変形症例(JRA日高育成牧場 佐藤文夫：獣医師)

3ヵ月齢の左前の強い外向肢勢馬への内側エクステンション(張出し)装着や充填剤による矯正の結果、矯正前のX線像で認められた蹄骨下縁内側のリップング(口ばし状のしゃくれ)が進行し、冠関節面の間隔にも不均等が認められたことから、3ヵ月齢までの矯正は、蹄骨の変形を引き起こす可能性があることを報告。

(5) 肢軸異常と蹄処置(NOSAI日高 家畜診療センター 佐藤正人：獣医師)

腕節や球節へのシングルスクリュウ法について、過去10年間の手術実態や手術日齢の推移等について報告。さらにX脚は満1歳までに手術すれば経過は良いが、球節の内反、外反などの軸ズレは1~1.5ヵ月齢が手術適齢期であるのに対して、球節の捻れや内向、外向は手術適例ではないことを説明。

(6) Club Footグレード4へのDr.Morrison・King装蹄師の装蹄療法&その経過(JBBA軽種馬生産技術総合研修センター 田中弘祐：装蹄師)

2010年、米国から招聘したDr. Scott MorrisonとRodney King装蹄師が実技研修会でClub Footグレード4の症例実馬に行った装蹄療法の概要と、その後の当該馬の経過について報告。Dr.Morrisonによれば当該馬は、本来は深屈腱支持靭帯切断術適例とのことであったが、切断術を施すことなく、適切な装蹄療法、運動制限や薬物療法を実施することによりグレード2まで回復し、主取りではあったが、HBAサマーセール上場までに至ったことを説明。

今回のワークショップには30名が参加し、その2/3が装蹄師でした。装蹄師は日頃から大勢の人の前で自分の考えや意見を述べるのが不得手な人も多く、座長から促され、あるいは指名されてようやく質疑に加わるという傾向も見られましたが、いざ指名され、口を開くと、堂々と自分なりの理論や意見を述べる人もいて、今後、回を重ねるごとに活発な議論が展開するのでは、と大いに期待が膨らみました。いずれにしても、装蹄師と獣医師が一堂に会してウマのアシと蹄のトラブルについて議論し、互いの考え方を理解することができました。まだ始まったばかりですが、この歩みを止めることなく、大きな成果に繋げていきたいものです。



講演風景



日高装蹄師会 設楽氏の講演